

令和3年度

人間発達科学部発達教育学科

帰国生徒選抜

小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 2 この問題冊子は、表紙を含めて10ページ、解答用紙は5枚、下書き用紙は2枚である。  
試験開始の合図があってから確認すること。  
なお、試験問題に文字などの印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどがあった場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 試験開始後に、解答用紙の指定欄に受験番号を記入すること。  
氏名を書いてはいけない。
- 4 解答は、指定された解答用紙に記入すること。  
指定された解答用紙以外に記入した解答は、評価（採点）の対象としない。
- 5 配付された問題冊子および下書き用紙は、試験終了後、持ち帰ること。

実施年月日
2.11.25
富山大学

令和3年度富山大学帰国生徒選抜

# 問題訂正



○11月25日(水)

小論文 9時30分試験開始 人間発達科学部発達教育学科

試験問題2枚目の上から2行目

(正) 用する能力」, 「②多様な・・・形成能力」, 「③自律的に・・・

(誤) 用する能力」, 「②多様な・・・形成能力」, 「③自律的に・・・

## 問題

次の課題文を読み、後の問いに答えなさい。  
 なお、課題文に関しては一部書き改めた部分がある。

## 課題文

グローバル化や情報化など、社会構造が著しい変容をなしている現在、学校教育は不易<sup>注1</sup>を踏まえつつも、新しい時代の新しい子どもたちに対応すべき「21世紀型学校ヴィジョン」への進化が求められる。まずは第1の視点として、子どもの学びを保障するハードウェア（建築・空間）の改革があげられる。画一化された学習環境（北側廊下一文字式校舎と四間×五間<sup>注2</sup>の長方形教室）から、オープン・スクールや個性化教育の実践にあるように、学校の空間と時間をデザインし直す課題である。

1970年以降、日本にもいくつかのオープン・スクールが出現したが、「子どもの能力や適性に応じて個別に教育計画を立て、開放された空間で自主的な学習を進める教育形態。あるいは、そうした教育を行う学校」（三省堂『デイリー新語辞典』より）という理念は、その後教育界に大きな影響を与えた。学校建築上の空間的デザインを工夫することによって、子どもが主体的かつ自発的に学べるようにハード面からとらえたのである。例えば、教室の壁が可動式であったり、オープンスペースが併設されたりしているため、教室と廊下の区別がなくなり、多様な学習形態の指導が展開できる。また、広さを生かした合同授業やクラスや学年を超えた交流活動、さらに教員間の連携や気軽な授業参観などが可能になる。時間的には画一的に区切られた時間割から、流動的に時間割を変更することも可能となる。

オープン・スクールの理念は、校舎の造りだけではなく、学校全体をオープン化することにより、従来の閉鎖的で固定的な教育の在り方を根本的にあらためるものである。その活動方法は多様であるが、例えば、異学年・異年齢の編成による活動をティームティーチングで行ったり、コンピュータや参考図書などの教材教具を身近に配置したりすることによって、自主的な学習活動を誘発する環境がつけられる。すなわち、伝統的な教室から出て、柔軟で能動的な教育へと改革する取り組みが可能となり、過度画一化(sign)から脱・定型(de-sign)へ、未来の学校ヴィジョンへの発展型として存在している。

新しい時代に必要な資質・能力の育成に、これまでもOECDが提唱する「キー・コンピテンシー<sup>注3</sup>」の育成やユネスコが提唱する「持続可能な開発のための教育(ESD)<sup>注4</sup>」が取り組まれている。これらの取り組みに共通しているものは、基礎的な知識・技能を習得するとともに、社会との関わりの中でそれらを実社会で活用し、主体的かつ協働的に探究し、問題を解決するという視点である。すなわち、「何を教えるか」だけではなく、「どのように学ぶか」という能動的な学習の在り方を問いながら個性を育てていくものである。そのモデル校のひとつが長野県信濃町立信濃小中学校である。

2012年4月、長野県信濃町に1つの中学校と町内5小学校を統合し、校舎一体型の小中一貫校が開校した。ユニバーサルデザイン<sup>注5</sup>の採用により、ケガや障がいをもった子どもも利用しやすく、内装に地域木材である赤松を使用していることで温かみを感じられる。教室の近くには、間仕切りがない「ティーチャーズ・ステーション」（※ナース・ステーションのような空間）が設けられ、子どもとカンファレンスをしたり、学習を支援できる場となっている。廊下が広く窓も開放的な造りで死角がない。職員室もオープンで、他学年の教職員とも気軽に話し合える空間を確保している。また、地域交流ホールや地域交流サロンが設けられ、地域の中核としての役割も果たしている。

同校の学年は9学年4・5制で、4年生までを初等部、5年生から9年生を高等部とし、5年から教科担任制となっている。校舎一体型なので、運動会や文化祭も共同で行い、異学年間の交流も活発である。

このように同校は、ハード・ソフト両面において、従来の義務教育施設の枠を超え、子ども・教師・地域の人々との交流活動の拠点としての役割を担っている。そしてオープン・スクールの理念を発展させた未来型学校として、開かれた雰囲気と人間関係のもと、「学習の主体者は子どもである」とし、子ども一人ひとりの個性を尊重する学習環境づくりに尽力している。

出典：青木 一「子どもの学ぶチャンスを生かす学習環境づくり」『教育の今とこれからの読み解く57の視点』多田孝志他編，教育出版，2016年

注1 いつまでも変わらないこと（さま）

注2 約7.2m×9m

- 注3 これからの社会を担う人々に必要とされる能力。「①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力」、「②多様な社会グループにおける人間関係形成能力」、「③自律的に行動する能力」という3つのカテゴリーで構成される。
- 注4 Education for Sustainable Development の略。これからの社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことにより、課題解決につながる新たな価値観や行動を生み出し、持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動。
- 注5 様々な差異や能力のいかんを問わず、すべての人にとって使いやすいように意図された製品・環境・情報のデザイン。
- 問1 課題文の内容を400字以内で要約しなさい。
- 問2 「子ども一人ひとりの個性を尊重する学習環境」をつくるためには何が重要なのかについて、課題文中の例以外の具体例を挙げながら、あなたの考えを800字以内で述べなさい。















見本

下書き用紙 2